

柴籬神社（しばがきじんじや）

開運松原六社参りのひとつ。社伝によれば、6世紀前半に24代仁賢天皇の勅命で創建されたという。18代反正天皇・依羅宿禰・菅原道真を祀る。

本地は5世紀前半、反正天皇がミヤコとした丹比柴籬宮の跡と伝える。『古事記』によると、反正天皇は生まれた時、珠のような美しい歯を持っていたので端齒別命と名付けられたとある。社務所の真向かいに歯神社があり、毎年8月8日の夜8時8分に万燈籠のもと、歯の神様の祭礼がとり行われるが、これは天皇の歯が立派であったことに由来する。

社務所の場所には、明治初年まで神宮寺の広場山観念寺（真言宗）があった。南門は観念寺の山門である。拝殿右側には慶安5年（1652）、左側には寛文11年（1671）の石燈籠が建つ。江戸時代前半、井原西鶴は同社に参詣して「柴籬宮 むくけうへてゆふ 柴垣の都哉」の句を詠み、『河内鑑名所記』（延宝7年、1679年）に載せられている。拝殿に嘉永7年（1854）8月、立部村氏子26名が奉納した「三十六歌仙図」が掛かる。

参集殿前には「天満宮 享和元年（1801）九月」と刻した手水鉢が置かれているが、これは全国で5番目に大きな前方後円墳の河内大塚山古墳（西大塚）の石室材と考えられる。墳丘上に祀られた菅原神社（明治41年に柴籬神社に合祀）の手水鉢に転用されていたものである。